







# ニッケイ俳壇

(846)

星野 瞳 選

アリアンサ 新津 稲陽

迷い入れし冥土の如く寒夕焼  
枯れるもの枯れ麻州野は夕焼けて

風止みしこの静けさも夜の秋  
珈琲園耳の短い兎住む

鉤焼きの最後は餅を入れて食ふ  
○一九一五年十月三日生れで、この十月で

百才になられる。一字も正しく書いて下さ  
る字がまともに書けなくなりましたがと

様だ。物凄く美しいであろう。大麻州の寒夕焼が目に浮ぶ  
庭焚火爺に聞かせるビオロン弾く

牧焚火ビオロン奏で唄うみたい  
ピツボ力喰み噛み火に当る

○ここにも大先達が居られる。一九一〇年  
生れ、十月で百五才になられる。寒鯉釣り  
をしてビオロン奏で唄う元気だ。お二人を  
見ると、俳句をやると老わないのでない  
かとも思われる。

サンジョゼスカンボス 大月 春水  
晴れわたる初冬の空に虹が立つ

置き竿の寒鯉釣りの鈴が鳴る  
庭焚火爺に聞かせるビオロン弾く

東 抱水  
アチバイア







